

# 資源添加率向上技術開発研究(マダイ)

(予算区分 県単 研究期間 平成20~22年度)

担当：伊豆分場

## 【研究の背景とねらい】

沿岸資源を持続的に利用するために、県内各地でマダイ、アワビ等有用種の種苗放流が行われています。これらについては、漁業者に放流効果の認識が定着し、放流経費の一部負担など事業化に向けた取り組みが進みつつあります。今後、放流事業の定着を進めるためには、放流効果をさらに向上させる技術開発と技術の定着化が必要です。

マダイの放流適地は水深が10m以浅で底質が砂場とされていますが、地先に放流適地が少ないため適切な放流が行われないことがあります。このような場所に放流した稚魚の生残率は非常に低く、資源への添加は期待できません。

適地へ放流することで放流効果を高めることが可能ですが、地先により環境条件が異なるために、放流適地の条件は一定ではありません。そこで、本研究では、放流種苗の資源添加率を向上させるためにマダイ等の放流適地の条件と放流効果を明らかにし放流技術の定着化を図ります。

## 【これまでに得られた成果】

- ・ ほぼ同規模の小規模漁港である下田市内の板戸港および外浦港に放流され、その後配合飼料を給与したマダイの滞留数および群れの形成等により放流効果の評価を試みました。
- ・ 放流約1ヵ月後の滞留数は、板戸港  $4,835 \pm 197$  尾(放流数約2万尾)、外浦港  $2,226 \pm 56$  尾(同約5千尾)でした。滞留率は、板戸約25%、外浦約45%でした。
- ・ 板戸および外浦港ともに、放流約1ヵ月後にも群れを維持していた。
- ・ 放流魚の成長は、放流約1ヵ月後で板戸港88.5mm、外浦港100mm(両所ともに放流時69.6mm)でした。



マダイ稚魚の港内放流



放流直後のマダイ稚魚

## 【期待される成果】

- ・ 放流適地として小規模漁港が利用可能となることで、県内各所で実施されている地先放流による資源添加率の向上が図れます。また、地先放流場所として、アクセスの良い場所での放流が可能となることから、市民等の放流事業への参加を容易にし、栽培漁業の啓発に繋がります。

## 【今後の計画】

- ・ 放流適地の探索と適地条件の解明 (平成20~22年)
- ・ 適地放流による放流効果の把握 (平成20~22年)
- ・ 放流技術の定着化 (平成20~22年)

(作成 平成21年4月)